

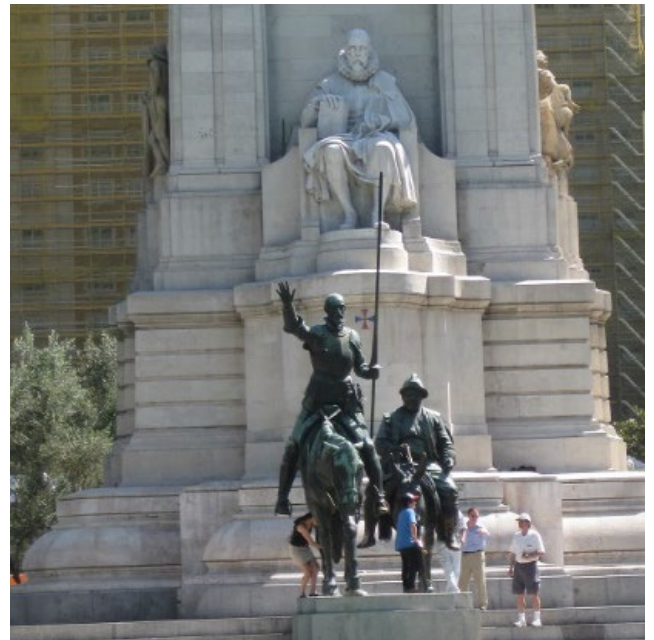
ドン・キホーテの故郷 スペイン

ドン・キホーテの長い長い物語（岩波文庫全6冊）をやっと読み終え何やらホッとした。子供のころから童話や子供向けの物語など様々なレベルで書かれているドン・キホーテの本を随分読んだが、常々作家セルバンテスの書いた全編に目を通したいと思っていたのである。

スペインの作家ミゲル・デ・セルバンテス（1547年～1616年）によって書かれた書名は「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」、前編は1605年に、後編は1615年に出版された。ストーリーの奇抜さ面白さにひかれ、いまでは世界各国で翻訳され愛読されている。

あらすじは騎士道物語を愛する郷土が、夢中で読み耽るあまり、いつの間にか本の物語と現実との区別がつかなくなり自身を遍歴の騎士と思い込み、そして遂には“ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ”と名乗り冒険の旅に出かけるのである。ドン・キホーテは相棒として農夫で人のいいサンチョ・パンサを従卒と一緒に旅をする。

世の中の不合理をただす信念に燃えて、旅の行く先々で珍事件を引き起こすのであるが、スペイン中部ラ・マンチャ地方の風物である風車をみて、魔法使いが巨人を風車に変えたと思い込み、槍を小脇に抱え回る風車に突進し跳ね飛ばされてしまうなど様々な蛮行奇行を繰り返す。



セルバンテスとドン・キホーテの像・マドリッド



風車の並ぶコンスエグラの丘

小説に登場する誰もが知っているのは、ロバにまたがっている農夫で従者のサンチョ・パンサ（パンサとは太鼓腹の意）、ドルシネア（ドン・キホーテの狂った頭が作り上げた理想の貴婦人）、それにドン・キホーテの愛馬である痩せ馬のロシナンテであろうか。

セルバンテスがドン・キホーテを書き上げるために、何度か訪れたスペインの中部地方ラ・マンチャはドン・キホーテが演じる様々な冒険の舞台である。

赤土のラ・マンチャは、アラビア語の乾いた

土地を意味するマンチャに由来するが、文字通り乾燥した赤土の大地が果てしもなく広がる台地で、穀物・ブドウ・オリーブの他サフランの栽培が盛んである。

風車のある丘の下に広がる静まり返ったプエルト・ラピセ村には、作者セルバンテスがしばしば訪れ宿泊した旅籠がある。旅籠の前の広場には大きな馬の水飲み場や、鎧を着けた痩せたドン・キホーテの人形が迎えてくれる。



風車の丘からプエルト・ラピセ村のたたずまい



静かな村のメインストリート

旅籠の今は、なかなか趣のあるレストランで二階に上がるとミニミュージアムとなっていて、世界中で翻訳されたセルバンテスの本などさまざまを展示している。また大きな土産物店が併設され世界中からやってくる観光客で賑わっている。土産店の店先にはおなじみのサンチョ・パンサのユーモラスな人形が出迎えてくれ、つい記念にぱちりと一枚写してしまう。

ラ・マンチャ地方は料理に珍重されるサフランの栽培が盛んで、店頭にも沢山並んでいる。土産にいくつか求めたが非常に高価なものであったことを思い出した。 (2009年)



旅籠 “ペンタ・デ・キホーテ”



旅籠の入口ではドン・キホーテが出迎えてくれる



パテオにあるレストラン



サンチョ・パンサが出迎えてくれた